

もふるくよりいへり、台記に康治元年五月十二日、乘燭程降雨如車軸、宇治拾遺物語に、車軸の如くなる雨ふりて、承久軍物語に、大雨をちくをふらし、又平家物語、吾妻鏡、曾我物語、太平記等にも出たり、宇都保物語、俊隆卷に、車の如くなる湯王の時、車軸を流したる事なし、もと佛書より出たる語なり、王安石が夢中作に、燭常是獨字、龍注雨如車軸、彼大海中雨滴如車軸、法苑珠林大三災に、依起世經云注大洪雨、其滴甚麤、或如車軸、或復如杵とあり、また世話支那草に、篠をつく雨といふこと、篠を束たる如くにふる雨なり、むさし野の之のをたばねてふる雨に、螢ならではなく虫もなし、誹諧崑山集に、正知之のをつきふりくるや、鏈梅の雨、吉野拾遺一巻に、またかきくもり之のをつくが如くふりいでければ云々、按ずるに、吉野拾遺一二の巻は、偽書也とて、群書類從に除かれたるは、卓見といふべし、之のをつくと云こと、無下に近き詞也、是も亦偽書の一證也、古くは之のにふるといへり、無名子永享三年道之記に、かしは原といふ所より、秋の雨之のにふる、また逍遙院殿の雪玉集に、むまや、袖もさぞふりくる雨は、之のづかのむまやのすゝのさよふかきこゑ、とよませ給ひしも、これなり、又今さりがたきことのあるとき、鎗が降ともゆくべしといふ俗語あり、韻語陽秋に、詩人比雨如絲、如膏之類甚多、至杜牧乃以羽林槍爲比、念昔游云、水門寺外逢猛雨、林黑山高雨、脚長曾奉郊官爲近詩、分明攪々羽林槍、大雨行云、萬里橫牙羽林槍、と見えたり、又卯の刻雨に、笠をぬげといひて、明がたにふりいづる雨は、必晴るといふ、重修臺灣府志に、稗海紀遊を引て、味爽時雨、俗呼開門雨、是日主晴、味爽是初明時也、と、かしこにもいふことなり、又春は海はれ、秋は山はるれば、日よりなりとて、春海秋山といふ、これも同書に、赤嵌筆談を引て、春日晚觀西、冬日晚觀東、有黑雲起、主雨、諺云、冬山頭春海口、といひて、雨を去るなり、又朔日に雨ふれば、その月中雨おほしといふ、吳中田家志に、上旬交月雨、謂朔日之雨也、主月内多雨、風吹、また江戸にて廿四五兩日はおほく雨ふるといふ、もろこしには、この日ふればなが雨なりといへり、陸游が劍